

---

# プールサイド

浅葉りな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
プールサイド

【Nコード】  
N3554C

【作者名】  
浅葉りな

【あらすじ】  
水の中にいるのは気持ちがいい。鼻をつまんで水底から空を見上げると、普通に空を見るとときよりもずっとキレイ。泳ぐのが好きな中学生・七海は、暇さえあれば学校のプールで泳いでいる。そんな七海をいつも、見ているのが小夜だった。

水の中にいるのは気持ちがいい。

鼻をつまんで水底から空を見上げると、普通に空を見るとときよりもずっとキレイ。

ひかりが水にきらきら反射して、空も雲も太陽もゆらゆら揺れている。

どうして私はえら呼吸ができないんだろう、と思う瞬間だ。もしも私にえらがあつたら、ずっと水の中にいられるのに。

実際には私はサカナでもなんでもなくて、ただの人間だから、1分もすると苦しくなってくる。

本当はもつと水の中から空をながめていたかったけれど、おぼれるのはつまらないから、プールの底を蹴って浮上する。

水の上に顔を出して頭を軽くふると、プールサイドの小夜と目があつた。

小夜はこの暑いのにシャツのボタンを上までしめてリボンで、学校指定の靴下までしっかりといた状態で日陰に座っている。

この暑いのにマジメだなあ、なんて、私はぼんやりと小夜を見ながら思う。

もちろん校則では、夏休みであっても校内では制服を着ること、とあるけれど、そんなことを守っている子はけっこう少ないと思う。特にプールサイドでそんなかっこをしている子は、ほとんどいない。今日みたいに顧問の先生がいないときなんて、みんなかなりいい加減だ。

「ねえ、別にずっとそこにいなくてもいいよ？ 暑いでしょ」

水の中から声をかけると、小夜はわずかに首を傾げた。おさげ髪がしゃらん、と揺れる。

「でもひとりでプールに入っちゃいけないって、決まってるじゃない？」

「そうだけど……別に平気だよ、慣れてるし。私がおぼれたりしないの、小夜ならよくわかってるでしょ？」

「もちろん。でも、なにが起こるかわからないもの。七海ちゃんになにかあったら、どうするの？」

小夜に言われて、私はくちびるをとがらせた。

小夜の言うことも、もちろんわかる。

プールに入るとき、ひとりきりで入らないように、というのは安全のためだ。

いくら慣れている人間でも、足をつったり、突然のトラブルでおぼれたりすることがあるから。

でも別に、そんなことはしょっちゅうあることでもない。

私みたいに、タイムをのぼすために泳ぐのでもなく、ただ水につかってぼんやりとしている人間には、そんな危険はほとんどないと言っていいと思う。

それに、きつと、小夜は退屈なんじゃないだろうか、と思うのだ。水にも入らないで、ただ私をながめていても、とくにおもしろいことはないと思う。

いつもは本を読んだりしているのに、今日はなにも持っていないし。

「……あ、七海ちゃん、ちょっと休憩したほうがいいんじゃないかな。もう1時間も水の中にいる」

小夜が校舎の時計を見ながら言う。

つられてそちらを向くと、たしかに、水に入ってからとくに1時間たっている。

「今日はあったかいし、平気」

でも、私は笑顔で答えた。

寒い日だったら気をつけたほうがいだろうけれど、今日はかなり気温が高い。むしろ、ずっと水につかっていたいくらい。

「ダメよ、そういうの、ちゃんとしないと」

小夜は怒ったように言っ、プールサイドに置いていたタオルを

持ってきてくれる。

仕方なく私は、プールからあがって、小夜からタオルを受け取った。

「でも小夜、ずっと見てるだけって退屈じゃない？」

私はまずは顔を拭いてから、帽子をとって濡れた髪を吹いた。

小夜は私にくるりと背中を向け、日陰のほうへ歩きながら答える。

「七海ちゃんが泳ぐところ、見てるの、好きなんだけどな」

「そう？ 別におもしろくないと思うけど……。私、フォームきれいいじゃないし」

「おもしろいよ。なんだか、サカナみたいでうらやましい」

ため息をつくみたいに言ってから、小夜は日陰に座った。

日陰にいと、小夜の色の白さがいつそう際立つように、私には思える。小夜みたいな子のことを、全身砂糖菓子みたいな女の子とこののたろうと思う。

「サカナ……。まあ、水の中は好きだけど」

私は歩きながらタオルをたたんで、小夜のほうへと近づいた。

一歩踏み出すごとに、じゅつと足の裏についている水が蒸発していくのがわかる。

コンクリートはじりじり焼けて、ずいぶんと熱かった。こうしてプールサイドで太陽のひかりを浴びていると、心底、早く水の中に戻りたいと思う。

そういう意味では、私はサカナに近いのかもしれない。

「私は泳げないから、うらやましいの。七海ちゃんみたいに泳げたら、きっと、もっと楽しいんだろうな」

小夜は太陽に手をかざしながら、ぼつりと言う。

「でも小夜には小夜のいいところだっていっぱいあるよ。私、小夜がうらやましいこととか、いっぱいあるもん」

私はぺたんと、小夜の横に座った。さすがに日陰だけあって、コンクリートは少し、ひんやりとしている。

「そう？」

小夜が首を傾げる。

「うん、そう」

私はうなずいた。

だって、私には、どうして小夜が私の友達をやっているんだろう、と思うことがよくある。

小夜はふわふわと可愛らしくて、男の子にも女の子にも人気がある。

ずっと私と一緒にいなくても、小夜にはいくらだって、仲よくする相手はいるのだ。

それなのに小夜は、どういうわけか、いつも私と一緒にいる。

小夜と私は正反対だ。

小夜は、おとなしくて運動が苦手で、本を読んだりするのが好き。逆に私は、しとやか、なんて言葉にはまったく縁がなく、運動以外にとりえもなくて、泳ぐのが好きで、本は読んでいると眠くなつて困るくらい。

テレビも、音楽も、洋服も、全部、小夜と私の好みは正反対だ。

たまに、うらやましいと思う。

私は絶対に、小夜みたいにはなれっこないから。

「でも、七海ちゃんが泳いでるの、見てると、なんだか水の中っていいなあって思うの。自分も泳げたら楽しそうなのになあって……。ほら、私、全然ダメだから」

「泳ぐのって別に、そんなに難しくないよ？　今度、教えてあげる。一緒に泳ごうよ」

まかせなさい、と私は自分の胸を叩いた。

「……うん、そうだね」

小夜は困ったように笑う。

あれ、と思った。

どうして小夜はこんな顔をしているんだろう。私、なにか、悪いことを言ったのかなと思ってしまう。

「あ、七海ちゃん、別になんでもないの。気にしないで」

そんな気持ちが顔に出てしまっていたらしく、小夜があわてて首をふった。

「そう？ 本当に？」

私はじつと小夜を見て訊ねる。

「う、うん…… なんでもないよ」

けれども、小夜は私から目をそらして、そつと息を吐く。  
やっぱりなにか隠しているんだ。

「小夜、隠しごと、してるでしょ？」

「…… そんなことないよ」

答える小夜の声は、ずいぶんと弱々しい。

「嘘」

私は短く言った。

「気になることがあるんだったら、ちゃんと言って。気になるよ」

「別に、七海ちゃんは悪くないの」

そう答えた小夜は、今度は私をまっすぐに見つめていた。

ああ、小夜は嘘なんかついてない。ひと目でわかった。

でも、だとしたら、どうして小夜はあんなふうにつつむいたんだろ。わからなかった。

じつと小夜を見つめていると、小夜はふいつと私から視線をそらして前を向いた。

「もう、来年にはここにいないんだよね。そう思うと不思議な気分にならない？ 高校生とか言われても、全然、実感がわかないなあ」

「私もそうかも。高校もプールが広いといいなあ。屋内プールだったら、冬も使えていいのに」

「七海ちゃんって、本当にそればかり」

小夜が吹き出す。

「だって…… 好きなんだから、しょうがないじゃない」

私は頬をふくらませた。

「でも、いいなあ……。うらやましい」

「そうかなあ？ あ、そういえば、小夜はこの高校行くの？」

「え？」

私の問いに、小夜は一瞬、大きく目を見開いた。

「……どうしたの？」

「あ、うつん。その……まだ、決めてないの」

けれどもすぐに笑顔に戻って、ゆるやかに首をふる。

「そうなの？」

私が訊ねると、小夜はまた、うつむく。

「あの……ね、すぐに、っていうわけじゃないんだけど。卒業したら、北海道に行くの」

「北海道？ 夏だったらいいけど、冬とかには行きたくないなあ。こっちよりずっと寒いんだよね。私、寒いのが嫌い」

寒いと泳げないし、とつけくわえて私は笑った。

「……違うの、旅行じゃないの」

「え？ どういうこと？」

「転校、するの。卒業まではこっちにいるけど……高校からは、北海道の高校に行くの」

私は目をぱちくりさせた。

北海道の高校に行く、って。いったいどういうことなんだろう。

私はじつと小夜を見つめる。

小夜はなにも答えてくれない。

遠くで、セミがジリジリと鳴いていた。

「まだ、誰にも言っていないの。七海ちゃんに話すのが最初。あの……ごめんね」

「そんな、謝ることないよ」

どうして、とか、なんで、とか、たくさん言いたいことはあるのに、私の口から出てきたのはそんな言葉だった。

それがわかったのか、小夜は力なく笑う。

「お父さんの仕事の都合だから、仕方ないの。本当は最後まで言わないでおこうかって思ったんだけど、七海ちゃんには言っておこうって思ったから……」



小夜はきゅつと眉を寄せて、今にも泣き出しそうな顔になる。

「大丈夫だよ、北海道って今、近いし。長い休みのときには遊びに行くよ、私」

「……うん。ありがとう」

小夜がぎゅうつと、私に抱きついてくる。

「わ、小夜！ そんな、濡れちゃう……！」

「本当に遊びに来てね」

小夜は私の驚きをよそに、強く強く、私の胸元に顔を押しつけてくる。

濡れるなんてこと、小夜にはちつとも気にならないみたいだった。

「うん、もちろん行くよ」

私はおそろおそろ、小夜の背中にさわった。

ふるふる震える小夜の背中を、濡れて冷たくなっている手で、そつとなでる。

「本当は行きたくないのに」

「……うん」

私はうなずいた。

なんだか、私はまだ、ふわふわとした気持ちのままだった。

小夜が転校してしまう、というのはわかった、ような気がする。

でも多分、私はまだ、実感としてそれを理解してはいなかった。

なんだか、あまりにも突然過ぎて、本当のことのように思えない。

小夜とは違う高校に行くのかなと、ぼんやりと考えたことはある。でもあくまでぼんやりと、であって、しっかりと考えたわけではなかった。

私と小夜は成績も違うし得意なものも違うから、きっと違うところに行くんだろう、それくらいの予測だった。受験生とはいっても、本人たちは意外にのん気なもので、3年生の夏休みあたりでは、まだまだ進路なんて決まっていなかった。

「それに……私が別の高校に行ったら、七海ちゃん、絶対、無理ばかりするもの。心配なの」

小夜は顔をあげて、冗談を言うような口調で言って笑った。

「あ、ひつどいなあ」

私はわざと、思いきり頬をふくらませた。

小夜が吹き出す。

「……ね、七海ちゃん、私が北海道に行っても、ずっと友達でいてね」

笑い転げながら、小夜が言う。

「当たり前だよ、なに言ってるの」

ぺしりと私は小夜の額を叩いた。

そして、小指を差し出す。

小夜は一瞬びっくりしたような顔をして、そのあとすぐに、私の小指に自分の小指をからめてきた。

小夜の小指は、ほんの少しだけ、震えている。

でも私はそれに気づかないふりをして、小夜に頬を寄せた。

くつついたところがじつとりと汗ばんでいく。でもそんなことも気にしない

で、私はずっと、そうしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3554c/>

---

プールサイド

2010年10月8日15時10分発行